

## 恐ろしいのは誰だ？

——アイスキュロス作『エウメニデース』416行について——

戸 部 順 一

## 序

コロスの長

ゼウスの娘よ，早速に一切を聞き知るであろう。

われらは，恐ろしい夜の子たち。

われらの住处，地底では呪詛の女神と呼ばれている。

Cho.

peusēi ta panta syntomōs, Dīos korē,

hēmeis gar esmen Nyktos aiānēs tekna,

Ārai d' en oikois gēs hypai keklēmetha.

(416 aiānēs T et Tzetz.ad Lycophr.406:aiānē M et M scholia)<sup>(1)</sup>

アイスキュロス『エウメニデース』415-7

トロイ戦争に勝利したギリシア軍の総大将アガ멤ノン王は，敵国の王女カッサンドラを戦利品として故郷アルゴスへ戻った。しかし彼を待ち受けていたのは，労いの言葉に隠された，王妃クリュタイメストラの奸計であった。無益な戦の火蓋を切るために，娘イピゲネイアを生贄に差し出した夫を憎悪し，その所業の代償にと，妻は夫の殺害を目論んでいたのである。アガ멤ノンはクリュタイメストラの巧妙な罠にかかり，彼女の太刀を三度受けて絶命した。しかしクリュタイメストラが誇らしげに宣言した復讐の終焉とは裏腹に，惨劇はこれで終わったわけではなかった。カッサンドラが今際に予言したように<sup>(2)</sup>，先代のアトレウスとテュエステス，彼ら

兄弟がアルゴスの王座をめぐって争ったことに端を発する王家の悲劇は、アガ멤ノンの殺害で幕を下ろすどころか、その後にオレステスによる父親の仇討ちが待ち受けており、しかもその仇討ち故に、母親殺しの大罪を犯してしまったオレステスが、今度は復讐の女神たち（エリニースたち）の追跡を受け、逃げ惑うことになるまで、その波紋を広げていったのである。

この殺害と復讐の連鎖を語る伝説は、すでにホメロスの時代には知られていた。アガ멤ノンの件は、トロイ戦争の後日談として『オデュッセイア』の中でも繰り返し語られている<sup>(3)</sup>。叙事詩の中で、また抒情詩の中で歌われてきた伝説を、アイスキュロスは三部作の悲劇『オレスティア』に仕立て上演した。第一部『アガ멤ノン』ではクリュタイメストラによるアガ멤ノン殺害が語られ、第二部『コエポロイ』は、父親の仇敵（＝母親のクリュタイメストラとその愛人アイギストス）を討ったオレステスが（見事に本懐を遂げたオレステスを称え、大団円となりそうなもの）エリニースたちの幻に苦しめられ、狂気の様で館を去るところで終わる。第三部『エウメニデス』は、母親殺しの代価をオレステスに払わせるために眠りから覚めたエリニースたちが、オレステスの母親殺しの是非を巡ってアポロンと論争を闘わすものの、アテナによって一つの解決が示され、復讐の連鎖に終止符が打たれるまでを描いている。アイスキュロスは、叙事詩では触れられていないオレステスの苦しみ（アリストテレスが『弁論術』で言っている矛盾である<sup>(4)</sup>）の解決を『エウメニデス』で示したが、オレステスを苛むエリニースたちをこの伝説に加えたのは、この詩人の発案によるものとされる。

さて冒頭に置いた2行の訳には、ある曖昧性が直ちに指摘されよう。す

なわち、「恐ろしい」という形容詞が「夜」を修飾しているのか、それとも「子たち」を修飾しているのかが判然としないのである。これは訳者＝筆者の訳文の稚拙さを露呈しているようにも見えるが、写本伝承上の問題がある故に、このように訳さざるを得ない事情を反映した結果でもある。ここで仮に「恐ろしい」と訳した語は、*LSJ*では第3変化形容詞に分類され、*aiānēs, es*が見出しとして挙げられている形容詞である（「恐ろしい」が適切な訳語であるのか、その吟味が本稿の目的の一つであるが、現在では定訳と見做されている岩波版『ギリシア悲劇全集』に「恐ろしい」との訳語が *aiānēs* にあてがわれているので、一応、この訳語で議論を始める<sup>(5)</sup>）。この形容詞はもっぱら韻文の中で用いられ、最も古い使用例としてはイアンボス詩人のアルキロコスがあり、それからアイスキュロス、あるいは抒情詩人のピンダロス、そしてソポクレスに、いくつかの使用例が認められる<sup>(6)</sup>。本稿において考察の対象としている『エウメニデス』416行も、*aiānēs*の使用例の一つである。しかし『エウメニデス』を伝えるテキストの中には、416行に現れるこの形容詞の語形として第1・第2変化形容詞のそれを採用しているものもある。例えばPageの校訂によるOCTでは、*esmen Nyktos aiānēs tekna* という読みが採用され、*LSJ*ではその変化形の存在に疑義が寄せられている語形が登場している。この場合は *aiānēs* は *aiānós* の女性形 *aiānē* の属格形となる故、この形容詞の限定する名詞は、性数格一致の原則に従い、直前の *Nyktos* (*Nyx* の属格) になる。従って、416行の訳は「我らは恐ろしい夜の、その子たちである」である。一方、例えばSidgwickが注解しているテキスト<sup>(7)</sup>では *esmen Nyktos aiānê tekna* との読みが採用されている。*aiānê* は第3変化形容詞の中性複数対格形であるから (*LSJ* において認められている形である)、*aiānê* が限定するのは *tekna* になり、よっ

てこの行の訳は「我らは夜の恐ろしい子たちである」となる。さてアイス  
 キュロスは, aiānés,és (あるいは aiānós, é, ón) を Nyx の限定に用いたの  
 か, それとも tekna を限定するために用いたのか。すなわち「恐ろしい」  
 のは「夜」という女神なのか, それとも「復讐の女神たち」なのか。本稿  
 の目指すところは, aiānés の限定する名詞および, aiānés のこの箇所での  
 語義の確定である。

## 1 aianes の語義

aiānés の意味を今一度ここで確認しておこう。まず, 辞書を覗く。*LSJ*  
 には, 「永遠の」とある。aiānés の前半部分 ai- が aiei, aiōn に由来してい  
 ると考えた所以であるが, 奇妙なことに「恐ろしい」という意味は記されて  
 いない。ところが『エウメニデス』の注解書を見ると, 例えば「アイスキュ  
 ロスは aiānés を「永遠の」と「恐ろしい, 悲痛な」の両方の意味で使用し  
 ている」とある<sup>(8)</sup>。「悲しい, 悲痛な」の意味は前半部 ai- が aiazō と関連す  
 ると考えられたからだろう。なかには「永遠の」の意味しか認めず, 「「恐  
 ろしい」は疑わしい。仮にほかの意味があるにせよ, それは「悲惨な」で  
 ある」と, *LSJ* に提示されている意味をあてがっている注釈者もいる<sup>(9)</sup>。あ  
 るいは逆に, この箇所の aiānés の意味を taeter だとする注釈者もいる<sup>(10)</sup>。  
 この意味の幅は何から導き出されたのだろうか。そもそもこの語はいかな  
 る要素の組み合わせでできあがっているのか。その語源を探れば意味の確  
 定は可能なように思えるが, 語源辞典を覗いてみても, 捗々しい成果は得  
 られない。例えば Chantraine はこの形容詞の意味を「ぞっとする, 残忍な」  
 と「永遠の」だとしながら, 「その語源は曖昧である。……この合成語の

前半は不明である」と解説している<sup>(11)</sup>。語源辞典は、この語の語源がそれほど明白ではないことを明らかにしているだけである。語源からの意味確定が不可能なら、古代の証言に耳を傾けるほかはない。LSJにせよ、注釈者たちにせよ、この語の意味確定のために、中世写本の欄外に記されている古注を利用したのは間違いない。写本に記されている古注には aiānēs の意味を以下のような言い換えで解説している。

- 1 Aesch. 『ペルサイ』 636 ta aiānē kai skoteina kai thlipsin kai akhlyn  
empoionta
- 2 Aesch. 『エウメニデス』 416 skoteina ē thrēnētika ē aiazein poionta
- 3 『エウメニデス』 572 diēnēke, para to aiei
- 4 『エウメニデス』 672 di' aiōnos
- 5 Pind. 『ピュティア競技祝勝歌』 1.83 diēnekēs
- 6 『ピュティア競技祝勝歌』 4.236 odyneron ē para tēn aian, to  
mega. ta gar megala tēi gēi eikazomen.
- 7 Soph. 『アイアス』 672 ho skoteinos kyklos ē adialeiptos

これら古注の解説するところを要約すると aiānēs の持つ意味は (A) 「暗い = skoteinos, akhlys」 (B) 「痛々しい, 悲しい = thlipsis, thrēnētikos, odyneros」 (C) 「永遠の = diēnekēs, di' aiōnos, adialeiptos」になる<sup>(12)</sup>。また稀語を集めて、それらの語義解釈を行なった5世紀のヘシュキオスによると「aiānon 1665:khalepon, deinon (過酷な, 恐ろしい)」とあり、中世の *Ety.Mag.* には、「to deinon kai polystonon (恐ろしいこと, 嘆き多いこと)」と解義されている。どうも注釈者たちが aiānēs の意味として LSJ にはない「恐ろしい, 悲痛な」をあげているのは、これらによるものと思われるが、逆に LSJ がなぜ「恐ろしい, 悲痛な」を排除したのかは分から

ない。また上の 1, 2, 7 で触れられている「暗い」の意味を採用している者も少ない。いずれにせよ, aiānēs に (A) (B) (C) の意味層が伝えられていることは分かった。そこで (A) (B) (C) を全てありえる意味と仮定して, 考察の対象としている『エウメニデス』416 にはどれが最も適切な意味であるかを考えることにする。ところで, そもそも aiānós なる形容詞をアイスキュロスは使ったのだろうか。アイスキュロスの作品を伝える中世写本のうち, この第 1・第 2 形容詞の語形を伝えているのは F (Florentinus 14 世紀成立) 及び T (Triclinius 14 世紀成立) の含まれる写本群である<sup>(13)</sup> (ただし T は『エウメニデス』479 に aiānê を残し<sup>(14)</sup>, 572 には MFT に等しく aiānê khronon とある)。M (Mediceus 10-11 世紀頃に成立) 及び, M の欄外に記されている古注 (古代にまで遡れるものを含む, という) は第 3 変化形容詞の語形を一貫して支持している。前述のヘシキオスは aiānón を見出しに掲げており, 古代末には第 1・第 2 変化形の形容詞としての aiānós の存在が認められていたことを窺わせる。どちらが正しい形なのか, それとも両方の変化形が存在したのか, 決め手はない。『アイアス』<sup>(15)</sup> 672 は古代では NYKTOSAIĀNĒSKYKLOS と書かれたであろうが, AIĀNĒS の Ē に曲アクセントを付けて読むか, 鋭アクセントを付けて読むか (すなわちアクセントなしで読む), それだけで aiānēs の格が異なるのである (前者の場合, 『エウメニデス』416 と同じ表現になり, 後者の場合, aiānēs は kyklos を形容することになる<sup>(16)</sup>)。そしてこの箇所においても両方の読みが伝えられ, scholia が後者を支持しているという事情は, アイスキュロスの場合と変わらない。結局のところ, また「どちらを修飾している方がよいか」から考えるほかはないようだ (Pind. の例は残念ながら未調査。しかし筆者が参照したテキスト<sup>(17)</sup>には第 3 変化形容詞の読みが採用されていた)。

## 2 ニュクスを形容した場合

さて、仮に aiānēs が「夜の女神」を形容しているとしたら、その意味は何であろうか。考えられる一つの答えは「永遠の」である<sup>(18)</sup>。エリニウス（コロスの長）はアテナの疑問に答えるために、415-7の台詞を口にかけている。アテナは復讐の女神を見て、彼女たちを神の族とも人間とも認めず、その出自を問い質す<sup>(19)</sup>。これは明らかに彼女たちへの侮辱である。アポロンは彼女たちの住処を「悪しき闇、地底のタルタロス」<sup>(20)</sup>、「血を吸えるライオンが住む岩屋」<sup>(21)</sup>と言い、地上での居場所を否定したが、それと呼応するかのようには、アテナもまた彼女たちが地上の世界の住人であることを否定しているのである。当然、エリニウスはこれに反論する形で、自分たちの出自を語っているはずだ。自分たちの神格を主張するなら、親の素性の由緒正しいことを言えよ。「私の生みの親は永遠の（＝不滅の＝神）ニュクスだ」は彼女たちの主張にそっている。しかし、ニュクスが神なのは叙事詩以来の伝統としてあるのだから、敢えて「永遠の」と言い添えて強調する必要があったのか、少々疑問は残る。

ヘシオドスは『神統記』の中で、カオス、ガイア、タルタロス、エロスを第一世代の神々に置き、そのうちのカオスからエレボスとニュクス（夜の女神）が生れ、さらにこの兄妹が結ばれてアイテルとヘメレが生まれた、と歌いながら世界が創造されてゆく過程を説いている<sup>(22)</sup>。ギリシアの宇宙創造論には、ニュクスからこの世界が生まれたと説明するものが少なくない。オルペウスの教えでは宇宙は夜に始まり、ムサイオスは、その始原をタルタロスと夜にした（ともに「闇」と関係がある）<sup>(23)</sup>。あのアリストバ



ネスでさえ「カオスとニュクスと、それに暗いエレボスと広いタルタロスが最初にあった。大地もアエールも天空もまだない。そしてエレボスの境のない胎で、黒い翼のニュクスが夫なしで卵を産んだ」とヘシオドスの系譜論を鳥に語らせ<sup>(24)</sup>、アリストテレスもまた然り<sup>(25)</sup>、である。闇から何かが生まれてくると言う発想はそれほど奇異ではない。女性の隠し処の比喩として用いられる凹み、うろ、洞窟はどれも闇の潜む所である。女性の股間の闇から赤ん坊の頭が出てくる不思議さと万物生成の神秘に相似性を覚え、闇の奥にこそ、それらを生み出す秘密がある、と考えたとしても以外ではなかろう<sup>(26)</sup>。日没とともに闇を引き連れて登場するニュクスが、世界創造の神としての地位を獲得したのは、闇こそが万物の創造の源という思想にある（ゆえにニュクスの館は大きな khasma = 裂け目にある<sup>(27)</sup>）。闇に対する思いは本来は畏敬、母体から新たな生命が生み出されることへの畏敬であったかもしれない。しかし「畏れ」は同時に「恐れ」に繋がる。闇はまた死界の象徴でもあったからだ（アポロンでさえ死を運ぶときには夜になる = 『イリアス』1巻47）。見通せぬことが、闇の中にあらぬものを想像させ、その先に冥界を創造させた。闇への、すなわち死への恐怖感は、それに対する嫌悪を人間に植えつけた。よって、ニュクスがひとりで生んだ子たちは、人間の見通せぬ「運」、「死」、そして人間に禍をもたらす「争い」、「欺瞞」、「愛欲」、さらにそれらに付き物の「非難」、「苦悩」である、とヘシオドスは説く<sup>(28)</sup>。闇を生産の源とし、それを畏れる感情はニュクスに万物創造に携わる女神としての地位を与え、ニュクスを尊崇の対象としたが、同時に闇に対する恐れは、ニュクス自体とは切り放されながらも、その生み出す神々に凝縮しているのである<sup>(29)</sup>。こうしてニュクスは生産と死という矛盾した側面を有する神となった。これが『神統記』で

歌われるニュクスである。

dnopherē (107 暗い, 陰気な), melaina (20, 123 黒い), erebennē (213 エレボスの=暗い, 陰気な), oloē (224, 757 破壊する), eremnē (758 暗い)。『神統記』のなかで, この女神を修飾している形容詞は, oloēを除いてどれも「闇」に関連する。この「闇」には, その根底において「畏れ」と「恐れ」が重なり合っている。「暗い」は生産を象徴し, この女神を称えるエピソードとしてある一方で, dnopherēが示唆し, oloeが明確に指示するように, ニュクスを死と結びつけている。無論, 夜の帳は当たり前のように「黒」であり, 闇空との連関からニュクスの形容語に「暗い」が使用されていることも視野にいれねばならぬ。ニュクスが駆る馬車が, harma skoteinonと歌われ<sup>(30)</sup>, この女神が羽織る着物が melampeplos = 黒衣と呼ばれているのは, ニュクスとともに訪れる「夕闇」を言っていることだろう(それでも, 死者を弔う女たちの衣が melampeplos であるゆえ, 夜空の漆黑にはやはり死が匂う)。

叙事詩, 悲劇を観察する限り, 「夜の女神」を形容する言葉は圧倒的に「闇」である。ならば古注が提示する「暗い」が aiānēs の語義候補に挙げられる(逆に, だから古注は aiānēs の意味に「暗い」を加えているとも言える)。「暗い」は宇宙創造の神, 原初の神としてのニュクスを想起させよう。よって「暗き夜」の子たちであるエリニウスたちは系譜上, アポロンやアテナよりも古い神となり, 両神による存在否定を覆す根拠を示したことになる。さらに「闇」の生産能力が, 謂わば母親のそれであったのを視野に入れば, 「暗き夜」には「母親の生みの力を持つ夜」という響きが重なり, すなわち「自分たちは母から生まれた存在だ」を含意し, 母親から生まれなかったアテナへの対抗意識を表わしているとも考えられる(なるほどアテナは

彼女たちを見て「おまえたちは人間の族と似ていない」と言うが、「人間の族」は *spartōn genei* とあり、文字通りには「種から育った族」、すなわち男から生まれた種族であり、それをアテナは否定しているのである<sup>(31)</sup>。このことは、彼女たちが最初にニュクスについて触れた際に「母なる」を繰り返し強調していたこととも符合し<sup>(32)</sup>、且つ、この悲劇のクライマックスである、アポロンとの論争（＝オレステスの父の仇討ちとしての母殺しは認められるか、すなわち子供は父親のものか、それとも母親のものか）の場において展開される、エリニュスたちの「子は母のもの」なる主張にも繋がる。よって *aiānēs* の意味するところは、ここでは「暗い」としたほうがふさわしい、と言えよう。

### 3 エリニュエスを形容した場合。

*aiānēs* が夜を形容するときには「恐ろしい」と言う意味は希薄で、寧ろ「暗い」あるいは「永遠の」がふさわしいように思われる、という結論を導いた。では *aiānēs* が「復讐の女神」を修飾している場合、「恐ろしい」という意味になるのか。ところで「復讐の女神」をニュクスの子としているのはアイスキュロスの発案で、ヘシオドスの伝えるところとは異なる。『神統記』には、ウラノスの男根がクロノスの大鎌によって切り取られた折に、そこから散った血が大地にかかりエリニュスたちが生まれたとされている<sup>(33)</sup>。それを敢えてニュクスの子としたのは、『神統記』の誕生説に従うと、エリニュスの誕生にはウラノスに関わることになり、「子は母のもの」なる主張の権化であるエリニュスの誕生には相応しくなく、ニュクスはひとりで子を生んでいるゆえ（そしてニュクスがひとりで生んだ子にはエリニュスと

混同されるケールがいる<sup>(34)</sup>), これを母親としたほうがエリニュスの主張に合致すると考えた結果かもしれない。また大地から生まれたエリニュスたちは、『神統記』の中では格別恐ろしい姿をしているわけではない。ただ力強い (Erinÿs kraterās) と形容されているだけだ<sup>(35)</sup>。結局のところ、エリニュスとは人間の「恨み」を神化したものであろう。「恨み」「怨念」が恐ろしいのは言わずもがなであるが、その恐怖感は、ヘシオドスにおいてはこの神の外見には結晶化していない。とは言え、彼女たちの外見に恐ろしいところがある、と認識されていたのも確かなようだ。『オデュッセイア』15. 234 では、この女神は theā dasplētis Erinys と歌われており、この形容詞 dasplētis の後半部分が pelazō に由来するのは確かなようで、前半の das- に、この語の異読 (d' aplētis, dysplētis) が明示する否定の意味を認めれば、「近づけぬほどに恐ろしい」となる<sup>(36)</sup>。ただしホメロスにも彼女たちの外見に触れた詩行はない<sup>(37)</sup>。

偶然か、この「近づきがたい」はアイスキュロスがエリニュエスを語るときにも使用している表現である (53 ou plātoisi)。またヘシオドスによれば、ニュクスから生まれたとされ、エリニュスとしばしば混同される神にケールがいるが、『盾』においてこの神の醜悪さが活写される際にも、やはり「近づきがたい (aplētai)」が使われている<sup>(38)</sup>。『盾』に描かれるケールの様子はアイスキュロスが描くところのエリニュエスとよく似ている<sup>(39)</sup>。実際、エリニュスとケールは区別されていない様にも思われ、エウリピデスでは、オレステスを追い回す復讐の女神は「恐ろしいケールたち (deinai kēres)」と呼ばれる<sup>(40)</sup>。アイスキュロスがエリニュスの外見をイメージする際に、『盾』の成立時には存在したであろうケールの絵を参考にした可能性は否定できない<sup>(41)</sup>。

パウサニアスは『ギリシア案内記』1.28.6で「アテナイの人々がセムナイ（畏怖すべき女神たち）と呼び、ヘシオドスが『神統記』でエリニウスたちと呼んでいる女神の神域がある。この女神の頭髮に蛇をからませたのはアイスキュロスが最初だ」と記している。この記事を信賴すれば、エリニウスの権能としての恐ろしさを、その外見に結晶化させたのはアイスキュロスが最初だったことになる（それまでも、エリニウスの禍禍しさを蛇で表現した事実はある<sup>(42)</sup>）。『コエポロイ』の最終段は、オレステスがエリニウスたちの幻に怯える場面で終わるが、その場面で「ああ、ああ！そこにいる、醜い女ども<sup>(43)</sup>、ゴルゴーンらのように、黒々としたその衣装、ところせましと巻き付けているのは、数しれぬ蛇の群れ！」（1048-50）と、オレステスにしか見えぬエリニウスたちの様子が語られ、やがて『エウメニデス』では、この復讐の女神たちはコロスとして登場し、観客の視覚に捕えられることになる。エリニウスたちを擬人化し、それを舞台上に登場させるに際し、アイスキュロスが工夫の限りを尽くそうとしても不思議はないが<sup>(44)</sup>、ところで実際には、どのような工夫がアイスキュロスに可能であったのだろうか。まず衣装。これは黒衣であると繰り返し科白の中で言及されているから、そうなのであろう。コロスに黒い衣装を着せるのは容易なことだ。しかも黒衣は弔いに女たちが着る衣装であり、「黒」は人間の流す血の色でもあり<sup>(45)</sup>、いかにも不吉である。オレステスはエリニウスの幻を見て、「黒衣」のほかに「たくさんの蛇が巻き付いている」と言って怯えていたが、パウサニアスの記事には「頭髮に蛇をからませている」とあり、また「ゴルゴンのようだ」と引き合いに出されているゴルゴンの髪が蛇なのはよく知られている。アイスキュロス同様に、ニュクスの子としてエリニウスを登場させたオウィディウスは、ユノの命にしたがって、イノーと

アマタスを破滅させるために出かけたこの神が、全身を蛇に絡まれている様子を描いている<sup>(46)</sup>。では、アイスキュロスはエリニユスの禍禍しさを外見で表現する工夫として、蛇を用いたのだろうか。

「ゴルゴンのようだ」は彼女たちを目撃した巫女の口からも漏れるが<sup>(48)</sup>、巫女はそのすぐ後で「いや、ゴルゴンの姿とも似ていない」と前言を翻す<sup>(49)</sup>。ゴルゴンとの比較はエリニユスが実際に姿を現す前に限られており、これらが登場してからは、彼女らの頭髮（＝蛇が何匹かくつついているような）について、あるいはどこかに絡みついていたかもしれぬ蛇について、それを指摘するような台詞はない。蛇が衣装を飾っていたなら、それへの言及があってもよさそうなのに、それが無いということは、蛇を表わすようなものはどこにもなかったからなのかもしれない（イーオーに角を付けて登場させたときには、それを強調する台詞が用意されている<sup>(47)</sup>）。巫女は「ゴルゴンの姿とも似ていない」と言った後で、「黒ずくめであること」「肝のすごいこと」「目から脂をたらしていること」を挙げて、彼女らの気味の悪さを伝えている<sup>(48)</sup>。エリニユス登場の直前に巫女によって言われたこの気味悪さは、エリニユス登場の後に観客にも認められたのだろうか。「黒ずくめ」は問題なし。巫女の聞いた「肝」はエリニユスたちの「唸り声」として観客の耳に真っ先に届く<sup>(49)</sup>。「目から脂」は仮面に何かしらの工夫があったことを示唆しているが、これを観客が認めたかは不明である。さて、*aiānēs*に戻ろう。*aiānēs*がエリニユスを形容し、その意味が「恐ろしい」なら、それはエリニユスの何の恐ろしさなのか。考察対象であるエリニユスの台詞がアテナの疑問に答えるものであったことは先に述べた。アテナの疑問は「見える」ことから生じている。*horōsa, thauma ommasin, horōmenās, morphōmasi*, わずか7行の間に視覚に関する語が繰り返されている。よっ

てエリニウスが女神に答えるとき、必ず「アテナが見た」ことに反論せざるを得なかったはずだ。ならば「恐ろしい」は外見の醜さを言っているのだろう。「私たちはニュクスから生まれた、見た目も恐ろしい子たち」とエリニウスは答えたのであろうか。しかし、これにも疑問が残る。一体、他人に言われるならいざ知らず、自分で自分のことを「醜い」と言う者がいるだろうか。もちろん *aiānēs* の意味を「暗い」と考え、彼女らの着ている黒衣、あるいは彼女らの住処の暗いことを指しているという可能性も否定できない。その場合「私たちは夜の、黒い装束を着こんだ（または暗き処に住む）子たち」になるが、自分の出自を語るうえで、敢えて黒衣（あるいは住処）に言及する必然性は乏しい。

アリストパネスの喜劇『福の神』には貧乏神（ペニア）が現れる。貧乏神は、福の神の視覚を取り戻そうという（その結果、福の神が正しい人間を豊かにすることになる）クレミュロスとブレプシデモスの計画を知って、その企てを阻止し、二人を懲らしめようと登場する。舞台に出てきた貧乏神を見たクレミュロスとブレプシデモスは、その外見の印象を以下のように語る。

クレミュロス おまえさんは誰だい。わたしの目には、ひどく気味の悪い顔色をしているように見えるが (*sy d' ei tis; ōkhra men gar einai moi dokeis.*) (422)

ブレプシデモス 悲劇から生まれたエリニウスみたいだ。狂気の様でしかも悲劇のようだ (*isōs Erinys estin ek tragōidiās, blepei ge toi manikon ti kai tragōidikon*) (423f)

423 行の古注には「エリニウスみたいだ=エウリピデスあるいはアイスキュロスが登場させたエリニウスたちを理由にして、ペニアをからかっている・・・

悲劇から生まれた＝悲劇詩人が作るように」とあり、また 424 行の古注は「悲劇のようだ」を「哀歌に相應しい、痛ましい (thrēnōdes)」と言い換えている<sup>(50)</sup>。これらの古注は、貧乏神の様子が悲劇に現れたエリニウスから借用されたものであることを明らかにしている。それ故、二人の台詞が指摘する貧乏神の姿から「悲劇に登場するエリニウス」の特徴を推し量ることは可能であろう。貧乏神の特徴は「顔色が悪いこと」と「哀歌に相應しい＝痛ましいこと」である。ōkhros (気味の悪い顔色) は「青白い (正確には黄みがかった白)」といった意味で、「恐怖のために顔色を失った」ことを語るときに<sup>(51)</sup>、あるいは家に引きこもり日を浴びずにいる者たちの顔色を指すときに使われる<sup>(52)</sup>。悲劇に出てくるエリニウスもこのような顔色をしていたのだろうか (なるほどエリニウスの住処は日のあたらない場所である)。(恐怖に) 青ざめたエリニウスは、たとえ哀歌は歌わないにせよ、その雰囲気は持っているだろう (彼女たちは、葬式のときに女が着る黒衣に身を包み、青白い顔をしているのだから)。『福の神』に登場した貧乏神が、アイスキュロスが創造したエリニウスの姿そのものであったかは分からない。しかし、一度作られたものが、後になって再び同じようなものを登場させる際の手本になることはよくある。松明を持って登場するエリニウスもいたことだろうが<sup>(53)</sup>、アイスキュロスのエリニウスが悲劇の伝統的エリニウス像であった蓋然性は高い。

#### 4 一つの結論

aiānēs が持つ意味として、古注は「暗い」「悲しい」「永遠の」を、またヘシュキオスは「恐ろしい」をあげていた。貧乏神の様子から、これらの



解義のなかで最も適した意味は「悲しい」であろう。よってエリニウスは「私たちはニュクスから生まれた、嘆きの子たちである」と言ったのではないだろうか。では、「嘆き」はエリニウスのどこに認められるのか。エリニウスのアテナへの返答はアテナのエリニウスたちの外見に対する訝しがりやを払拭するためのものであった。『福の神』の貧乏神は青白い顔色をしていた。すなわち、そのような色の仮面を付けていたのである。この仮面はエリニウスのつけていた仮面の色であろう。目から脂を流しているのを表現する仮面の色は、当然のこと、異様な色をしていたに違いない。それが *ōkhros* で語られる色ではなかったのか。日を浴びぬ不健康な者たちにも、この色の仮面が被せられたのは『雲』が証明している。アテナの目に異様と映ったエリニウスの顔色は *ōkhros* をしていたのである。しかしこの色は、人間がある感情から蒼白になったおりの顔色でもある。恐怖は嘆きにも通じる。ならば *aiānēs* は古注の言うように *aiazō* から作られた語であろう。エリニウスは自分のことを「呪詛の女神 (*Ārai*)」と呼ぶ。人の恨みを果たすために、彼女たちは眩くのである。「眩き」は不吉なものであっても、同時に恨みのもとに対する嘆きでもあろう。このエリニウスの呪詛を、アイスキュロスは仮面の色に象徴させ、それを *aiānēs* = 嘆きの色と名付けたのではなかろうか。よって『エウメニデス』416は「我らはニュクスより生まれた、嘆きの面相の子たち」と解釈したい<sup>(54)</sup>。

## 注

- (1) D. Page ed. *Aeschyli Tragoediae* Oxford 1972 をテキストとして訳出した。( ) 内はこのテキストの欄外異読。

- (2) 『アガメムノン』のなかで、カッサンドラが半ば意味不明の言葉で伝える予言は、一方でアガメムノン殺害の遠因を語り、他方で第2部『コエボロイ』でのオレステスの行動を予告している。「カッサンドラの予言」については、『ギリシア悲劇全集』第1巻（岩波書店 1990）PP.294-98を参照せよ。
- (3) トロイ戦争終結の後も、故郷イタカに戻らぬ父オデュッセウスの消息を聞くために、搜索の旅に出たテレマコスは、旅の途中で出会うアテナから、またネストルから、アガメムノン殺害の件と、その仇を討ったアガメムノンの息子オレステスの噂を聞かされる（『オデュッセイア』第1, 3, 4巻）。また冥界に下ったオデュッセウスの前にはアガメムノンの亡霊が現れ、長く故郷を留守にした者は帰国に際し注意を怠ってはならぬことを、自分の惨めな体験を例にあげて忠告している（第11巻）。
- (4) アリストテレス『弁論術』2・24・1401a35「その女が死ぬこと、そして息子が父親の仇を討つこと、このことは為されたし、為されたことは正しい。しかし、この二つのことが結合した出来事は恐らくもはや正しくない」
- (5) 『ギリシア悲劇全集』第1巻収録の『エウメニデス』はPageの校定本を訳しているゆえ、「恐ろしい夜（ニュクス）」となっている。
- (6) P.Chantraine *Dictionnaire etymologique de la langue Greque* Paris 1968 aianes の項を参照。
- (7) A.Sidgwick *Aeschylus Eumenides* Oxford 1902（第3版）
- (8) 例えばSidgwick 416への注
- (9) Drakeの注。
- (10) Wilamowitz-Moellendorffの注。
- (11) Chantraine（注6）
- (12) 6『ピュティア競技祝勝歌』の古注の意味を視野に入れば「巨大」も可能な意味になるが、「永遠の」にこの意味は含めた。なお古注に関しては『オレスティア』のそれはG.Thomson *The Oresteia of Aeschylus* Amsterdam 1966 第1巻の古注を利用。それ以外のものは各作品の注釈に乗っているもの、およびこの論文のきっかけを与えたR.Cantarella *Aristophanes' Plutos 422-425 und die Wiederaufführungen aischyleischer Werke* (H.Hommel 編集 *Wege zu Aischylos*1 Darmstadt 1974 所収) に引用されていた古注を利用した。
- (13) Sidgwick 416の注を参照。『オレスティア』の写本については、Thomson

(注 12) 第 1 巻 pp.61-64 を参照。

- (14) Page のテキストの ap.crit. には aianê とあり、第 3 変化形容詞の体格形が Tr に残されているとしているが、Thomson は Tr が aianê (第 1・第 2 変化形容詞の女性単数主格形) と記したとしている。M はもちろん aianês である。aianê と読んだ場合には、nosos は noson にする必要があり、この変更は Thomson の推薦する読み (479 に対する注を見よ) である。
- (15) ソポクレスの作品で、672 行に関しては『エウメニデス』416 行と同じような問題が指摘される。
- (16) この行を aianês を曲アクセントにし、Nyktos を修飾させたとき、「永遠の夜」が浮かび上がるが、これはルキアノスの *V.H.*119 にある nykti diēnekei と同じことになり、表現としてないわけではない。
- (17) B.L.Gildersleeve *Pinder The Olympian and Pythian Odes* New York 1976 (Chicago 1885)
- (18) Drake, Sidgwick の解釈。
- (19) 『エウメニデス』406-12
- (20) 『エウメニデス』72
- (21) 『エウメニデス』93f.
- (22) 『神統記』116-125
- (23) M.L.West *Hesiod Theogony* Oxford 1966 116 行への注、及び 123 行への注を参照。
- (24) アリストパネス『鳥』693-5。コロスのこの系譜論がヘシオドスの思想から影響を受けたものである等に関しては、N.Dunbar *Aristophanes Birds* Oxford 1995 pp.437-42 を参照せよ。
- (25) アリストテレス『形而上学』1091b4
- (26) 「闇」と「女体」と「生産」については、R.Padel *Women: Model for Possession by Greek Daemons* (A.Cameron, A.Kuhr 編集 *Images of women in antiquity* London 1993 所収) に興味深い考察がある。
- (27) 『神統記』740-5
- (28) 『神統記』211-25
- (29) West 224 行への注を見よ。
- (30) 『コエポロイ』660f.
- (31) 『エウメニデス』410
- (32) 『エウメニデス』321

- (33) 『神統記』 176 - 85
- (34) エリニウスとケールの混同については、West 217 行への注を見よ。
- (35) 『神統記』 185
- (36) Cunliffe (R.J.) *Cunliffe A Lexicon of Homeric Dialect* Norman 1977  
は das- を「家」と関連づけ、「敵意を持って家に近づく者 = 家を襲う者」と解釈する。dasplētistis については、W.B.Stanford *The Odyssey of Homer* New York 1958 p.248 (234 行への注) を参照せよ。
- (37) 『イリアス』 10 巻 571 で、エリニウスが「闇を歩く (ēerophoitis)」と形容されているゆえ、二足歩行しているとのイメージは持たれていた。
- (38) 『盾』 250
- (39) 死にそうな者の血をすする様子が『盾』では描かれているが、『エウメニデス』でもエリニウスが血を求める存在なのは強調されるところだ。またケールのわきに控えるアクリュスの様子も、我々が後に提示するエリニウスの仮面の色が「青白い」ものだとすれば、類似した点が指摘できよう。
- (40) エウリピデス『エレクトラ』 1252, 1300。
- (41) OCT (3d ed.) Hesiod の項を参照。
- (42) A.G.Gravie *Aeschylus Choephori* Oxford 1986 pp.345f. を参照せよ。
- (43) 「醜い」 = dmoiai の読みについては、Gravie 1048 行への注を見よ。
- (44) アISKYLOS が、舞台上の視覚効果に力を入れた詩人ではなかったか、という推論については、拙稿「アリストパネスにおける“TERAS”の意味」成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』第 17 集 1998 を見よ。
- (45) 例えば『イリアス』 1 巻 303, 『オデュッセイア』 16 巻 441 等。
- (46) オウィディウス『変身物語』 4 巻 491-96
- (47) 『縛られたプロメテウス』 588
- (48) 『エウメニデス』 53 (近づきたい軒), 54 (両目からは忌むべき脂が垂れている)
- (49) テキストには、コロスの最初の台詞 (117) として mygmos と書かれている。この「唸り声」は 120, で繰り返され、123, 126 では「喚き声 (ogmos)」に変わる。
- (50) アリストパネスの古注は、Fr.Dubner *Scholia Graeca in Aristophanem* Paris 1877 を使用。

- (51) 例えば、『イリアス』1巻35, 『オデュッセイア』11巻529, 『平和』642等。
- (52) 『雲』103, 1016, 1112を見よ。
- (53) オウィディウスは「血に漬けた松明を取り上げ」と言っているが（『変身物語』4巻483）、これが悲劇の場面から作られたものなのかは不明。
- (54) 結局、我々の得た結論は Cantarella（注12）をどれだけ超えられたか、疑問が残るが、彼の示唆を膨らませていけば、我々の歩んだ長い旅になるのではないかと考えたい。

本稿は2002年度成城大学特別研究助成金による研究成果の一部である。